



全道展に寄せて

小梁川重彦

星霜十五年とひと口に言つてしまえば簡単であるが、その十五年は並々ならぬ世相であつたと言える。これらの足跡を回想すると、全道展の創立に苦勞をされた人たちが、推進に力を尽した人たちは、まことに感無量であらうと思う。空椅子と引替えに絵具を買わなければならなかつた時代、カンバス代りのベニヤ板に筆がスリ切れるほどこすりつけて描かれなければならなかつた時代。そんな時代が遠のいてしまつても、どこか鼻柱が強くキカン気の全道展の気ッぷは相変わらず脈うつて自分たちの芸術の世界を日本地図の上に拡大して行つてゐるらしい。その間に、詩の都サッポロも、いつか文化都市と看板が変わり、次第に外観も整つて来つた。これは電気洗濯器やテレビが殖えたことよりも、芸術発表の場、芸術活動の場としてのこの街が「静」から「動」へ推移していることを物語つてゐるのかも知れない。が、しかし、である。絵が売れないということは経済力の弱さばかりでなくて、精神文化の弱体であるとも言えそうである。

全道展十五年の歴史は、こんご、精神分野にとくに鑑賞者の開拓史に力を致す時期に入つたと考えるのは、岡目八目であらうか。

往年の新進諸氏、髪に銀を加え、額に皺を数えても、意気軒昂で活躍して居られるのは楽しい。青年の精神が、いつ迄も承け継がれ良き文化の担い手であられるように期待する次第である。

(札幌 市民会館館長)

絵と私

小島邦久

私は自分では絵はかけないが、展覧会を見ることは好きだ。たくさん作品の一つ一つを丹念に見たりまた丹念に味わつていくなんてことは、とてもできないし、またわかりもしないが、たくさん作品がかもしますムードに浸つてゐるうちに、思わず足をとめさせる何かしら力をもつた作品があることは事実だ。自分の心を振いたたせてくれるような絵、反抗を感じる絵等々。

そうした絵には、作家の個性が強く表現されてゐるとてもいいのか、長い間印象に残つてゐることがある。

それに、そんな作品をかいた人とか、多少なりとも自分が知つてゐる人などの作品を、年を追つて見ていくことは、また楽しいことだ。その人たちが、年々成長していく様子がよくわかり、時によると、その人の生活をまで勝手に想像してみることもある。

アブストラクトというのだそうだが、抽象画が、どの展覧会も非常に多くなつてきたが、これなどは最も強い反抗を感じたものだった。しかし近頃、線と面と色彩が構成する画面に非常に親しさを覚え、なにかしら心にふれるものを感じてきた。

全道展と共に私も成長してきたのだろうか。ただし、ああした絵に、「やけ跡」とか「工場」とかのような作品名をつけてあることに對しては、まだ自分自身へ抵抗を感じてゐる。

(札幌 西創成小教員)



	<h1>粋な酒場</h1>			
	<h1>白い花</h1>			
	Tel 5-2665			
	南4西5 電車通り			

創立のころ

関口二郎

美術のことについて、ぼくが物を書くなどは、これが初めてで、おそらく終りであろう。それほど、この世界に縁が遠いのであるが、全道展十五周年という機会は、妙な男に原稿を書かせることになったものである。

ともかく、全道展の発足した昭和二十一年に、ぼくは道新で文化部長をやっていた。文化部長で絵のわからぬのも困ったものだが、だからといって仕事をしないわけにゆかぬ。

幸か不幸か、戦後の荒廃した中なので、芸術論はぬきにしても、やらなければならぬ仕事はあつた。潰滅状態の芸術の諸分野に再建の機会と場をつくることである。機会と場を提供すれば、あとは専門家がやってくれるだろう。そんな腹づもりでいるところへ、ときどき出逢つたのが、田中忠雄、山内壮夫、国松登、松島正人といった諸氏であつた。ご承知のとおり、これらの人達は疎開作家と呼ばれていた。

もちろん、ぼくは、この人達とは別に、能勢氏、今田氏など、地元にあつて、大正年代から道展を育ててきた人達を知っている。だから道画壇の再建という構想には、初めから「全」を目論んだのであつて、道展と対立したり、無視したりする気はないのであつた。したがつて、準備会にも招請しているわけだが、参加してもらえなかつたことから、結果として疎開作家を中心に事を進めようになつてしまつたのは残念だつた。

能勢氏や今田氏は道展を担つてきた人だけに、ぼくらが、「道

展」そのものの再建という方法をとらなかつたことに同意できなかったのかも知れぬ。それは無理からぬことであり、ぼくもやむをえないと考へた。

しかし、道展のままということになれば、当然、戦時中の種々の事情を歴史として含むことになる。そんなことは取りあげるほどのものではないという見解もある。だが、いまは何もかも一たん脱ぎすてるのが本当ではないかと考へて踏切つたのだつた。かえりみて、それがどうだつたかは、依然として判断のつかないことであるが、十五年経つて、まだ判断ができないというのも、門外漢である故だと思ふ。

(北海道新聞社事務部長)

寸感

更科兼蔵

近頃は難解な絵画が多くなつて来た。たとえば最近来日したフオートリエの作品などは、ジャーナリズムによつて大きく取り上げられたけれども、私にとつては猫に小判で、てんでそのよさがピンと来ない。ただ何となく無気味さだけを感じられるだけである。古くはモンドリアンとかカンジンスキー等の作品でも私には一向に絵の価値がわからない。それが一流大家の作品としてまかり通つているというのであれば、自分の鑑賞能力というものにもまったく自信を失わざるを得ないというものだ。

最近具象系の絵画が次第に影が薄れ、むずかしい非具象系が著しく進出して来ている。俳句や短歌の世界でも前衛派の作品は難解である。ただ難解な作品が最も進歩的なものだという錯覚におちては困ると思ふ。低い鑑賞能力しか持たない一般大衆は、こ



皆さまの オアシス

ば- やまざき

サッポロ 南5.西4. Tel③ 9098

の現実にもつたく戸まどいしている有様だ。

比較的幼年層はありあまる精力や、やむにやまれぬ反抗やによつて勢の赴くところ、相繼いで抽象にはしるの結果、大衆はこれに追いつけず、作者と鑑賞側とのギャップが増大しつつある。ことに団体展における非具象の占めるパーセンテージは年々大となりつつあるが、これが昂じると展覧会も大衆から遊離してしまふおそれがある。いつたい団体展なるものは作品鑑賞の場としては上乘とはいえないが、それにしても昨今のごとく非具象が多くなると、会場が妙に騒々しい落着かない雰囲気になつて、私などは無意識に会場を素通りしてしまうことがよくある。きくところによるとパリでも改めて具象画を見なおす傾向が見えて来たというが、今のように非具象が氾濫すると、かえつて素晴らしいあるいは風変わりな具象絵画の出現への欲求が強くなつて来る。

(医師・札幌チャーナル会員)



○安保反対札幌美術家のつどいという一〇〇人ばかりの静かなデモがあつた。美術家だけのはじめての行進である。

岸内閣のファッション的なやり方に、絵描きもだまつてはいられないのは当然だ。

○絵かきはアトリエで絵を描いていればいいんだとか、政治的なものには関係したくない、という人々も居る。

戦時中も静かに、自由にアトリエで絵をかいていた人々にちが

いない。

うらやましいかぎりだ。

○民主主義が破壊され、創作の自由も圧迫されるような危険を感じるのは、たまらない、だまつていられない。

○アトリエで静かに仕事が出来た日があるように、みんな叫んでいるのだ。いかりをこめて歩いているのだ。美術家もその愛好家も、どんどんこの行進に加わつてゆくだろう。(HON)

× × ×

○昔のことを知ろうとすればどうしても資料が必要になる。われわれが生きている間の資料はそれぞれの関係者が責任を持つて保存しておきたい。口伝は伝説にはなつても、歴史としては残らない。後世、あのころの人間はなにをしていたんだなどといわれなために、どこかに美術資料室でも作つておきたい。(WT)

× × ×

○札幌もとうとう五十万を突破したそうさ。東京以北第一の都市で、文化の水準も高いんだと誰かがいつたが、いまだに美術館がない。このことは今まで何回か発言があり要望されてきている。市長さん、この辺で一つ文化の面にも眼を向けて、腰をあげてくれませんか。

○ある日、「材料ですか？ この頃はペイントやら石膏やらでネ、キャンパスも南京袋で……。」といつたら相手の紳士「それでも油絵ですか。」と大変面白くなさそう。

「さあ、何といつたらいいでしょうか。ペンキ絵とでもいいませうか。」「？……」昔は使用した材料で水彩画、油絵などとわけていたが、この頃のように材料が自由に使われると、こんな名前がおかしくなつた。早くなくさないと一般の人が迷惑しそうだ。(義)

旅館ういす亭

朝里川温泉

閑静で

上品な旅館

電話小樽(2) 6875



事務所からのおねがい

○第一回学生全道展は大変充実した展覧会であり、好評を得ました。今年第二回展をやります。会期その他未定ですが、目下準備中。御期待下さい。

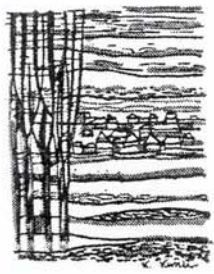
○第一五回全道展はいかがですか。どんなことでも、感想なり希望なり事務所へお知らせ下さい。

全道展を更に良いものにして行きたいと思つています。

○地方展をごらんになつた方も、感想をおきかせ下さい。もつともつと充実した展覧会に行きたいと考えています。

事務所— 札幌市北二十東七 本田方

全道美術協会



あごがき

○昨年お約束しましたように、第十五回展を迎えて、いささか読みごたえがあり、記念となる目録をお贈りすることが出来て喜んでいきます。僅かな資料を手がかりに、調査と執筆に多大の時間と労力を費し「十五年史」を執筆して下さつた道新の竹岡氏の御苦勞に深甚の謝意を捧げます。

○また、部外の関口、小梁川、小島、更科の四氏よりフリーな立場からの一文を頂いて華を添え、パラエターを得たことは嬉しいことで、誌上から厚く御礼申し上げます。

○今月一月一日、創立会員上野山清貞氏逝去され、一沫の淋しさを感じない訳にはいきませんが、それと共に会の年輪の深さも改めて考えさせられることです。あらためて弔意を表すと共に、高橋北修氏の渋味ある追悼文により故人を偲んで頂きたいと思ひます。

○会員諸氏の制作意図は、始め出品目録の中に入れ、観る人の便宜にしようと考えたのですが、頁数の関係でどうしても御覧のようにしなければならなくなり残念です。御了承願ひます。

○いつものことながら道新の事業部長、木村両氏の並々ならぬ御助力を頂いて本年も無事展らん会を開くことが出来ました。厚く御礼申し上げます。

○では、みなさんの一層の御健闘をお祈りして拙ない編集のペンを擱きます。